

機関番号：11301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520367

研究課題名（和文） ドイツ語における文法化現象の実証

研究課題名（英文） An evidential study on the grammaticalization in German

研究代表者

嶋崎 啓 (SHIMAZAKI SATORU)

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：60400206

研究成果の概要（和文）：一つの動詞が助動詞になる場合、並行的な意味を持つ他の動詞と連動して変化する。例えば動詞 sein は、中高ドイツ語の時代（11～14世紀）までは一般的な受動の助動詞として多用されていたが、現代ドイツ語では限定的にしか用いられないが、完了形助動詞としては依然として用いられる。英語で be は受動の助動詞として発達し、完了形の助動詞としてはもはや用いられないことは、英語で have がドイツ語よりも間接受動としてよく用いられ、完了形としてはドイツ語ほど発達していないことと連動している。

研究成果の概要（英文）：A verb synchronizes with another verb with parallel meaning when it becomes an auxiliary verb. For instance, the verb 'sein' which was multiused as auxiliary verb of passive in Middle High German (11-14 century) is used only for limited in Modern German though it is still used as a auxiliary verb of perfect. That the verb 'be' has developed in English as auxiliary verb of passive and it was not used any longer as the auxiliary verb of perfect is parallel with the phenomenon that 'have' in English is used more than 'sein' in German as indirect passive and has not developed as auxiliary verb of perfect.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：独語学、ドイツ語史

1. 研究開始当初の背景

(1) 文法化とは、おおよそ語彙的要素が時代を経て文法的要素に移ることが定義することができる。しかし、近年の文法化理論は、文法化を具体的意味から抽象的意味への移行と捉え、「語彙的」と「文法的」という対立項を重視しなくなってきた。例えばドイツ語の weil は本来「～するあいだ」という時

間の意味を持っていたが、時代を経て、「～だから」という原因、理由の意味を表すようになった。この weil の意味変化は具体的意味から抽象的意味への変化ではあるが、語彙的意味から文法的意味への移行ではない。近年の研究はこのような変化も文法化の一例と見なすようになり、従来の理論よりも包括的に「文法化」という現象を捉えるようにな

ったと言える。しかし、語彙的範疇と文法的範疇のあいだに連続性があるとは言え、両者の区別が必要であることも確かである。例えば、近年の認知言語や失語症の研究は、語彙的範疇と文法的範疇では脳内の処理の場所が異なることを明らかにしつつある。もしこれが事実であるとすれば、語彙的範疇から文法的範疇への移行という「狭義の文法化」は脳内の処理領域が変わるといふ劇的な変化であり、単に具体的意味から抽象的意味へ移るといふ「広義の文法化」とは区別されるべきである。しかし近年この区別は重視されなくなってきた。

(2) 研究代表者はこれまで主として、ドイツ語の現在完了形や未来形および受動態、再帰動詞の歴史を研究してきた。特に現在完了形の研究に関しては、従来の説とは異なり、完了形のhaben+過去分詞がbekommen受動のような間接受動を基礎としないこと、現在完了形の発展途中の中高ドイツ語期に現代英語の現在完了形のような完了、継続、経験の意味を表す段階が存在したこと、現在完了形の発達に過去形が衰退したためにそれを補完するために現れたのではなく、むしろ逆に現在完了形の発達が過去形の使用を制限したことなどを、ゴート語、古高ドイツ語、中高ドイツ語、初期新高ドイツ語、新高ドイツ語の資料から大量の用例を収集分析して実証し、博士論文『ドイツ語現在完了形の歴史的变化』(2004年)としてまとめた。そしてこの研究を通じて、一般に文法化は漸次的変化であると言われるが、実際には、8世紀までほとんど現れなかったhaben+過去分詞という形が9世紀後半に一気に使われ始めると、habenと過去分詞はそれぞれ自立した意味を表さず、haben+過去分詞を一つの意味単位として使用されたことが分かった。

(3) また再帰動詞の歴史的变化については、拙論「再帰動詞と他自動詞の歴史の変遷」(2006年)の中で、再帰動詞はもともと人間の状態変化を表す形式であり、物の状態変化しか表さない再帰動詞の例は870年頃の文献Otfridの中で初めて現れたことを明らかにした。しかし現代ドイツ語では他動詞の自動詞化として再帰動詞が多用され、物が主語になる場合が多いが、その用法がどのように広がったかは明らかではない。また、現代ドイツ語ではwerdenを助動詞として受動態や未来形が作られるが、拙論「ドイツ語受動形sein+PPとwerden+PPの通時的諸相」(2000)ではかつてはドイツ語の受動態表現としてはsein+過去分詞がwerden+過去分詞と同様に動作受動を表すものとして用いられ、werden+過去分詞が「愛されている」のような継続的事態を表すのは初期新高ドイツ語

期以降であり、中高ドイツ語期までは状態受動を表すsein+過去分詞が継続的事態をも表していたことを明らかにした。また拙論「歴史的に見た未来形werden+不定詞」(2007)では、現在の事態についての推量や、1人称主語で「～するつもりだ」という意志、2人称主語で「～せよ」という要求を表す用法が初期新高ドイツ語期の16世紀の資料に現れることを示し、開始相→未来→推量という順序で意味が変化したという通説も否定されるべきであることを明らかにした。しかし依然としてwerdenの受動や未来の助動詞としての機能の確立する過程は明らかではなかった。

2. 研究の目的

(1) 近年の文法化理論は言語の共時態の中にも文法化現象を見ようとするため、意味の連続性を重視する傾向が強いが、本研究ではむしろ語彙的意味と文法的意味の非連続に注目する。すなわち研究の目的は、近年主流となっている「広義の文法化」ではなく、古典的とも呼ぶべき「狭義の文法化」のメカニズムを解明することにある。

(2) 具体的には、ドイツ語の再帰動詞における対格再帰代名詞や助動詞werdenの文法素化(語彙と文法が対立的であり、語彙素という表現が可能であればこのような言い方も可能だと思われる)の過程を明らかにすることが研究目的となる。再帰代名詞の文法素化に関しては、物が主語になる再帰動詞の用法の発展過程が問題になる。また、werdenの文法素化については、過去分詞とともに用いられて受動態の助動詞として継続的な事態を表す用法の発達や、不定詞とともに用いられて未来形の助動詞として推量の意味を表す用法の発達が考察の対照になる。

3. 研究の方法

研究の方法は用例を収集し、意味に基づいて分類するという作業を行った上で最終的に理論化するというものであり、その点は基本的に変わらない。ただし個別的には次のような点に注意する。

(1) 対格再帰代名詞を伴う再帰動詞については、事物が主語になる用例の収集が作業の中心になるが、その際、それぞれの動詞が他動詞として用いられる場合に目的語が人間になることがあるのかという点にも注意が必要である。これまでの研究から、再帰動詞の主語は人間から事物へ移っていったという仮説を立てている。もし人間から事物へという変化が生じたとすれば、他動使用法で人間が目的語になることが基盤になるはずである。そのため他動詞用法での目的語の性質

を合わせて分類の観点に加える。

(2) 受動態の werden+過去分詞については、継続的事態を表す用例が主たる収集の対象となる。完了的な意味を持つ werden が継続の意味を表すということは、werden の語彙の意味は失われ、文法素化が果たされたことを意味する。その用例を見つけることができるか考察の鍵となる。

(3) 未来形の werden+不定詞については、推量の用法の収集を中心に置く。現段階においては werden における推量の意味の発生メカニズムについては解明できていない。この点については単に用例を集めるだけではなく、ある程度抽象的な理論化がなければ意味変化の経過を明らかにすることはできないと思われるので、用例の分類のあとに理論の構築を目指す。

4. 研究成果

(1) 対格の再帰代名詞をとる再帰動詞がドイツ語においてどのように発展したかという問題については、中高ドイツ語期 (1050～1350 年) にはすでに事物を主語とする用法が確立していたことが明らかになった。その際、以前には事物を主語とする用法は人間を主語とする用法から派生的に作られたことが予想されたが、実例を見る限り、その想定は当を得ていなかったことが分かった。例えば、heben「持ち上げる、起こす」が再帰用法で事物を主語として「起こる」を意味する例が多数見られるが、heben が他動使用法で人間を目的語とする例がほとんど見られないことを考えると、再帰用法は他動詞用法での対格目的語が再帰用法で主語に繰り上がって作られると見るべきであり、人間を主語とする再帰用法から派生されるとは考えがたい。さらに中高ドイツ語では verliehen「失う」が再帰用法で「失われる」を表す例も少なからずあり、これは中高ドイツ語の再帰動詞が受動態化する過程にあったことを予想させる。ただし、現段階では、das Buch verkauft sich gut のようないわゆる中間構文の出現の時期を確定するには至っていない。sich verlieren においても、中間構文の特徴である動作主が存在が明確には考えられないので、中高ドイツ語ではまだ中間構文は確立していなかったと見るのが妥当である。そして受動的な再帰用法が先に出現していることを踏まえると、受動態化は中間構文の成立の前段階にあると考えられる。また、他動詞用法の目的語が自動詞用法で主語になる他・自動詞については、事物が状態変化の対象となる用法がプロトタイプのであると想定していたが、実例を見ると、むしろ場所の移動を表す用法が意味の中核にあることが

明らかになった。この成果については拙論「中高ドイツ語『イーウェイン』における他・再帰動詞と他・自動詞」で発表した。

(2) ドイツ語の受動態を表す werden+過去分詞は、werden という動詞が本来「～になる」という完了的な意味を持つので、もともと「～される」という完了的な事態のみを表していたのに対し、現代ドイツ語では、er wird geliebt「彼は愛されている」のように「～されている」という継続的な事態を表すことも可能になったという意味的な変化がいつ生じたのかについては、明確な答えを出すことができなかった。問題になったのは、意味を確定する際に多くの用例が完了的な意味を持つとも継続的な意味を持つとも解釈可能であるということである。特に一般論的な事態を表す場合は、「その魚は好んで食べられている」、「その魚は好んで食べられる」のように、動作様態的に両方の意味を含むことが多いので、区別することは難しい。初期新高ドイツ語の実用散文にはそのような一般論的な事態を表す受動態の例がかなり見られるが、多くの場合動作様態という点では不明瞭である。そこで lieben「愛す」や hassen「憎む」のような特定の動詞による例を収集することを目指したが、そのような例は実際には多く現れないことが明らかになった。最終的には文脈から意味を確定するという古い手法によって分類する以外に方法がなかったが、そのためには対象となる動詞による用例が非常に少ないため現段階では意味変化の時期を確定できていない。戯曲のように会話が多く用いられる文献では表現される事態の時間関係が比較的明確であるので、調査対象をそこにしぼって今後も用例の収集を継続する必要がある。

(3) ドイツ語の未来形の werden+不定詞については、werden が「～になる」という意味を持つという特殊性が問題になる。他のゲルマン語では英語の will や shall のように話法に関わる助動詞が未来助動詞になったのに対し、werden には話法的な意味がない。もともとドイツ語では古高ドイツ語以来、英語の shall に相当する sollen が未来助動詞の機能を果たしていただけに、なぜ初期新高ドイツ語期から werden が未来助動詞化するのが問われる。この点に関しては、ドイツ語では werden が受動態の助動詞としても用いられるということが未来助動詞 werden の成立に関わるのではないかと仮説を立てた。この点で示唆的なのは英語の be が受動の助動詞として用いられるということである。ドイツ語で be に相当する sein は、中高ドイツ語までは一般的な受動の助動詞として多用されていたが、現代では状態受動と

いう限定された意味しか表さない。ただし sein は完了形助動詞としては依然として用いられている。現代英語で be が完了形の助動詞としてもはや用いられないことは、英語で have が間接受動としてよく用いられるのに対し、ドイツ語の haben が間接受動にあまり用いられないことと連動している。このように見ると、ドイツ語の sein は完了形助動詞としての役割を大きく持ち、受動助動詞としてはあまり機能しなくなり、その結果 werden が受動の助動詞の中心となって、「なる」の意味から離れ、未来助動詞としても「なる」とは意味的に無関係な話法的意味を高めたという経過を経て、werden が未来助動詞として発達していったと考えられる。この成果については「ゲルマン祖語から西・北・東ゲルマン語への変化」で口頭発表した。

(4) 上で述べた語彙的範疇が助動詞となって文法的範疇へ変化する過程において、werden が助動詞化するという特異性を明らかにするためには他のゲルマン語との比較が有効な手法になることが明らかになった。その際に鍵になるのは、sein と haben が示すような平行関係である。このように平行関係にある動詞が助動詞化する場合には、sein が受動の助動詞の面を強める場合には haben も間接受動の助動詞としての面を強めるというように連動的に変化することが予想される。その意味で今後は古アイスランド語の vera, hafa や古英語の beon/wesan, habban といった動詞の助動詞化との比較を試みたい。また古アイスランド語の未来の助動詞 munu も「意志」という willに通じる意味を持つので、それらとドイツ語の werden の意味的变化にも注目して比較考察をしたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 嶋崎啓、中高ドイツ語『イーウェイン』における他・再帰動詞と他・自動詞、東北ドイツ文学研究、査読無、51号、2008、123-145
- ② 嶋崎啓、西・北・東ゲルマン語の諸相、日本独文学会研究叢書、査読無、2011、印刷中

[学会発表] (計1件)

- ① 嶋崎啓、ゲルマン祖語から西・北・東ゲルマン語への変化、日本独文学会 2010 年秋季研究発表会、2010 年 10 月 10 日、千葉大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

嶋崎 啓 (SHIMAZAKI SATORU)

東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：60400206

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし